

芦屋大学論叢 第86号
(令和8年7月31日)抜刷

逃れられない心の構造

— 自己の自明性の崩壊と支配への従属 —

林 知 代

逃れられない心の構造

— 自己の自明性の崩壊と支配への従属 —

林 知 代

芦屋大学臨床教育学部特任教授

1 序論

虐待や支配の被害者が、自らを傷つける他者に従い続けてしまう現象は、臨床心理学において長く重要なテーマである。なぜ人は逃れられないのか。なぜ反抗できないのか。この問いは、単なる性格特性や意思の強弱では説明できず、むしろ自己の構造がどのように形成され、どのように崩れていくのかという問題として捉える必要がある。

本論文で扱う R の事例は、この「逃れられない心」の構造を理解する上で極めて示唆的である。R は、社会を震撼させた尼崎連続殺人事件において、女性主犯格とされた S の片腕として行動し、マスコミからは「暴力装置」と呼ばれた人物である。筆者は本事件において弁護側の依頼に基づき心理臨床家として関わった。本論文における R に関する記述は、筆者が担当した心理評価の経験に基づくものであるが、個人情報保護および守秘義務に十分配慮し、公判で明らかになっている事実および臨床的理解に必要な範囲に限定している。面接内容のうち、個人の特定につながる情報や未公開の詳細は一切含めていない。

SCT（文章完成法）は彼の心理状態を把握するために特別に作成したものであり、その内容には、外側に見せる威圧的な態度とは対照的に、内側に潜む脆弱さ、誠実さ、そして自己の揺らぎが明確に表れていた。面接初期、R は、背中一面に彫られた入れ墨を、服を脱いで見せるなど、強さを演じる行動がみられた。日本文化において入れ墨は反社会性や威圧の象徴として理解されることが多く、これは脆弱な内的世界を隠すための防衛的な偽りの自己として解釈できる。一方で、R は SCT では小さく整った文字で率直な回答を示し、弁護士とは良好な信頼関係を築いていた。このような一見矛盾した行動は、単なる従順さや共犯性では説明できず、彼の内的世界における分裂と乖離を示唆している。

本論文では、Laing（1946/1985）のいう分裂を「自己一致感の崩壊」として捉える。Parnas & Sass（2001）は、自己の基盤を「経験が自分のものであるという暗黙の感覚（“The basic sense of self is the tacit sense that experiences are mine.”）」と定義している。この観点からすれば、自己一致感とは、自分の感情・意志・行動が自分自身に属するものとして経験される感覚であり、自己の統合性を支える中心的な基盤である。しかし虐待環境では、この一致感が早期から損なわれやすく、自己の感情が自分のものとして感じられず、他者の意志が自己内部に侵入しやすい状態が形成される。

R が継父からの虐待を受けながら、さらに結婚して社会的安定が見えた矢先に、S のもとへ連れていかれたことに対して、非難や怒り、悲嘆といった感情表現がほとんど見られず、事実のみを淡々と述べる無感情さは、自己一致感の崩壊を象徴するものである。

自己一致感の崩壊を理解するために、本論文では Laing（1960, 1961, 1967）が提示した存在論的不安と偽りの自己の概念、ならびに Stolorow（1994, 2007）の間主観性理論、とりわけ重要な他者から「応答されない情動（uncoresponded affect）」を独りで抱え込まざるを得なかったことによる自己組織化の破綻という視点を中心に考察する。また、Sass（1992）の自己性の障害(ipseity disturbance)という視点からみれば、

自己の一貫性・主体性・自明性が揺らぎ、自分が自分である感覚 (ipseity) が弱まる状態を意味する「自己の自明性の喪失 the loss of natural self-evidence」が生じていたと考えられる。

自己の脆弱化によって、人は自分の判断に自信が持てない、自分の感情が自分のものとして感じられない、他者の視線や評価に過敏になるといった状態が生まれる。これは支配者に従属しやすい心理構造を形成する。R の場合、S との支配関係の中で応答されない情動が再活性化し、恐怖・屈辱・無力感などの情動が生じたとしても、その表出は嘲笑・否定・罰として返ってきたことは想像に難くない。継父との間で体験された支配-被支配関係が再演され、自己の崩壊感がさらに深まったと考えられる。

Laing は、自己境界の脆弱性と「侵入される世界」(1960/2017) の体験を通して、自己がどのように崩壊していくかを描いた。また、外側に強さを演じる偽りの自己が、内的脆弱性を覆い隠す防衛として機能することを示した (Laing 1967)。一方、Stolorow (1994) は、虐待環境における応答されない情動がどのように内的世界を歪め、他者への過剰適応を生むかを明らかにし、こうした情動の孤立がトラウマ体験の核心にあると論じている。これらの理論は相互補完的に、R の内的世界に生じていた構造的変容を説明しうる。

本論では、虐待や支配の被害者がどのような内的世界を生きることになるのかを理解するために、Laing (1960, 1961, 1967) と Sass (1992) の現象学的精神病理学、そして Stolorow (1994, 2007) の間主観性理論という二つの視点をを用いて理論的枠組みを構築する。これらの理論は異なる学派に属しながらも、自己と他者の境界、世界の体験のされ方、そして支配と従属の構造という共通のテーマを扱っており、相互補完的に統合することが可能である。

R の行動を単純に事件の「加害者」・「共犯者」として捉えることは、内的世界に生じていた構造的変容を見落とす可能性がある。本論文は、これらの理論的視座に立ち、R の心理構造を「逃れられない心のメカニズム」としてモデル化し、自己一致感の崩壊がどのように支配への従属を生み出すのかを明らかにすることを目的とする。これは、個別の事例を超えて、虐待や支配の被害者に共通する心理構造を理解するための理論的枠組みを提示する試みでもある。

2 Laing 及び Sass による現象学的理解

Laing (1960/2017) は、精神病的体験を単なる症状ではなく、その人が生きている世界そのものの構造の変容として理解した。彼の中心概念である「存在論的不安 (ontological insecurity)」は、虐待や支配の被害者がどのような世界を生きているのかを理解する上で極めて有効である。存在論的不安を抱える人は、自己の境界が脆弱で、他者が侵入してくるように感じ、世界が脅威として迫るように体験する。また、自分の意志を持つことが危険に感じられ、他者に合わせることでしか存在を保てないという感覚を抱く。これは単なる不安ではなく、存在そのものが危ういという根源的な不安である。

虐待環境で育つ子どもは、まさにこのような世界を生きる。親の怒りや不機嫌が突然襲いかかる環境では、世界は予測不能で脅威に満ちており、子どもは常に「侵入される世界 (a world of intrusive others)」(Laing, 1960) の中で生きることになる。Laing (1961) はさらに、虐待環境では他者の価値観が内的世界に侵入し、自己を占領する “The other's system of values may infiltrate and colonize the inner world of the self.” (*Self and Others*, Chapter 2) と述べ、これを内的世界の植民地化 “colonization of the inner world” と呼んだ。

こうした視点から見ると、R が継父に対して陰性感情に触れられなかったのは、単なる抑圧ではなく、継

父の価値観が内的世界に侵入し、自己の一部として取り込まれていたためと理解できる。これは、自分であるという感覚の崩壊を意味している。

Laing (1967) は、存在論的不安を抱える者が、脆弱な内的世界を守るために外側に強さや安定を演じる「偽りの自己 (false self)」を形成すると述べた。偽りの自己は、内的脆弱性を守るための鎧であり、他者に合わせるための演技であり、「本来の自己 (true self)」を隠すための構造として機能する。R が拘置所に入れ墨を見せた行動は、この偽りの自己を象徴するものとして捉えることができる。外側に強さを演じることで、内側の脆弱さを守ろうとする心性である。

Sass (1992) は、統合失調症の核心を「自己性の障害 (ipseity disturbance)」として捉えた。Sass が使用している語、ipseity とは、自分が経験の主体であるという感覚、自分の思考が自分のものであるという感覚、世界と自己の境界が自然に保たれている感覚、そして自己存在の自明性 (mineness) を指す。Sass の議論は精神病理学に基づくものであるが、その構造は虐待や支配の被害者の体験にも深く通じる。Parnas & Sass (2001) は、自己の基盤とは「経験が自分のものであるという暗黙の感覚 (The basic sense of self is the tacit sense that experiences are mine)」と述べ、この感覚が弱まると、感情・意志・行動の所有感が失われ、自己一致感が崩壊するとした。すなわち自己と世界の自明性の喪失を伴う体験構造の変容である。

虐待環境では、子どもは常に親の機嫌を読み、自分の感情より他者の感情を優先する状態に置かれる。その結果、自分の感情が自分のものとして感じられず、自分の意志が自然に湧いてこず、他者の意志に吸収されるという体験が生じる。これは、R が S に完全に従った心理状態と重複する。自己の境界が脆弱であるために、他者の意志が侵入しやすく、自分の感情が自分のものとして感じられず、自分の意志が自然に湧いてこないという構造が形成される (Laing, 1960, 1961, 1967 ; Sass, 1992) 状態であることがわかる。すなわち、自己の自明性が弱まりを意味している。

こうした状態にある人々は、他者に合わせることでしか存在を保てず、外側には偽りの自己を形成して自らを守ろうとする。この構造は、R の行動・態度・対人関係の特徴と極めて整合的である。Laing が描いた「侵入される世界」と「偽りの自己」、Sass が論じた「自己性の障害」は、虐待や支配の被害者が生きる内的世界の構造を異なる角度から照らし出しており、両者を統合することで、R の心理構造をより深く理解することが可能となる。

3 Stolorow の間主観性理論における「応答されない情動 (unresponded affect)」

Laing と Sass が、精神病的世界がどのように体験されているかを描いたのに対し、Stolorow (1994, 2007) はその世界がどのように形成されたのかを明らかにする。彼の間主観性理論は、精神病理の核心を個体内部の欠陥ではなく、情動が他者との関係の中でどのように扱われたかという間主観的文脈に求める点に特徴がある。乳幼児の情動は、他者の応答性によって初めて意味づけられ、統合される。したがって、情動が重要な他者に共感的に受け止められず、理解されず、否定されるとき、その情動は「応答されない情動」として心的世界に孤立したまま残存する (Stolorow, 1994, 2007)。

Stolorow によれば、トラウマとは出来事そのものではなく、「情動が他者に応答されず、孤立したまま固定されることによって成立する “Trauma is not defined by the event itself but by the experience of unbearable affect that remains unresponded to and unintegrated.” —Stolorow, *Trauma and Human Existence*, 2007, p.23 “Unbearable affect becomes traumatic when it cannot find a responsive relational home.” —p.18」。

孤立した情動は自己の中で統合されず、凍結されたまま保持されるため、後の人生において類似した対人状況に遭遇すると再活性化し、耐え難い苦痛や混乱を引き起こす。この再活性化は、個体に幼少期と同様の反応パターンを再演させ、他者への過剰適応や自己抑制を強める。

虐待環境では、子どもの情動は他者に届かず、他者が応答してくれず、自分の感情が意味づけられず、逆に他者の感情が侵入してくるという間主観性の破綻が生じる。この破綻は、自分の感情が自分のものとして感じられない体験であり、自己一致感の崩壊へとつながる。

この理論を R の生育歴に照らすと、彼の心理構造における脆弱性の形成がより明確になる。R は継父からの暴力を受け、さらに弟を守るために自ら暴力の標的となる役割を担っていた。この状況において、彼が経験した恐怖、悲しみ、無力感といった情動は、誰にも理解されず、共感的に受け止められることがなかったと推察される。すなわち、これらの情動は応答されない情動として心的世界に孤立したまま残存し、彼の内的基盤に深い傷跡を残したと考えられる。

Stolorow の理論が示す重要な点は、応答されない情動は単に抑圧されるのではなく、応答されずに凍結されるという構造を持つことである。この凍結された情動は、応答されない情動として心的世界に孤立したまま、彼の内的基盤に深い傷跡を残したと考えられる。この凍結された情動は、後年、類似した対人関係に置かれると再び活性化し、幼少期の生存戦略を再演する。R の場合、S との関係がまさにこの再活性化の契機となった。S は彼の情動に共感的に応答するどころか、否定し、嘲笑し、支配することで、彼の内的世界に凍結されていた応答されない情動を強烈に刺激した。その結果、R は幼少期からの生存戦略である、外向きの強さ（虚勢）、従順さ、自己抑制、他者への過度な適応、を再び発動させ、支配関係に深く組み込まれていったと言える。

さらに、Stolorow (1994, 2007) は、応答されない情動が再活性化すると、自己の連続性が崩れ、存在の足場が不安定化し、個体は「自己の崩壊感 (self-fragmentation)」や「存在の不安定さ (existential instability)」を経験すると述べる。R が S の前で主体性を失い、自己判断が困難になり、S の意向に過度に従属し依存的になったことは、この理論的枠組みと整合する。彼の従属は性格的弱さに起因するのではなく、応答されない情動の再活性化によって引き起こされた間主観的トラウマ反応として理解されるべきである。

興味深いのは、S の死後、R が弁護士という、応答してくれる他者に出会ったことである。弁護士は彼の語りを否定せず、安定した態度で受け止めた。この関係は、彼にとって初めて情動が応答される経験であり、凍結されていた情動が安全な文脈で解凍される契機となったと考えられる。SCTに見られた素直さや率直さは、偽りの自己ではなく、本来の誠実で繊細な自己が部分的に回復した兆候と解釈できる。

以上のように、Stolorow の間主観性理論は、R の心理構造を理解するうえで極めて有効である。彼の従属や主体性の欠如は個体内部の欠陥ではなく、幼少期の応答されない情動が支配関係の中で再活性化した結果として生じたものであり、支配者の不在と応答的他者の出現によって本来の自己が部分的に回復したという点に、彼の心理の核心があるといえる。

4 事例分析：R の心理構造

R の事例は、虐待・支配・従属というテーマを理解する上で極めて示唆的である。彼は幼少期に継父から虐待を受けていたにもかかわらず、心理検査 (SCT) では彼を一切非難しなかった。また、結婚し家庭を築きかけた矢先に S によって離婚を強制され、その後は彼女に完全に服従するようになった。拘置所での面

接では入れ墨を見せるという強さの演出を行う一方、SCT では小さく整った文字で率直に応え、弁護士とは良好な関係を築いていた。

これらの一見矛盾した行動は、単なる性格特性や共犯者としての役割では説明できない。むしろ、幼少期の虐待、家庭の喪失、S による支配という連続した体験が、彼の内的世界の構造そのものを変容させていたと捉えることができる。

幼少期の虐待は、子どもの内的世界に深刻な影響を与える。Laing (1960) が述べる存在論的不安は、虐待環境で育つ子どもが生きる世界のあり方を的確に描写している。存在論的不安を抱えると、自己の境界が保てず、他者を侵襲的に感じ、世界は脅威として迫るように体験する。また、自分の意志を持つことが危険に感じられ、他者に合わせることでしか存在を保てない。

R は、継父からの暴力を、弟を守るために自分が叩かれた、と語っている。これは虐待の痛みを語るのではなく、自分の痛みを消し、他者のために耐えるという存在様式を示している。Laing (1961) の視点から見ると、これは自己の境界が脆弱で、他者の要求が内的世界に侵入している状態である。

SCT で継父を非難しなかったことは、単なる抑圧ではなく、Laing (1961) が述べた「内的世界の植民地化 (colonization of the inner world)」として理解できる。虐待環境では、加害者の価値観が内的世界に侵入し、子どもは加害者の視点で世界を見るようになる。加害者の声 (価値観・判断) が自己の声として内面化される “He may come to experience the other's voice as his own.” —Self and Others, 1961。つまり加害者を否定することは自己の一部を否定することになるため、継父を非難することは自己の存在基盤を揺るがす行為となるのである。

Stolorow は、「心的現象は常に間主観的な情動空間の中で生じる (All psychological phenomena are constituted within a relational, intersubjective field.)」(Stolorow, Contexts of Being, 1994, p.5) と述べる。虐待環境では、この間主観性が深刻に破綻する。子どもの情動は他者に届かず、他者は応答してくれず、恐怖や悲しみは意味づけられないまま内部に孤立する。Stolorow (2007) はこれを「応答されない情動」と呼び、こうした情動は自己の一部として統合されず、後に恐怖や無力感として再活性化し、他者への過剰適応を生むと述べている。

R が継父への怒りや悲しみを語らなかったのは、感情が欠如しているのではなく、応答されないまま凍結された情動が内的世界に孤立していたためと理解できる。間主観性が破綻すると、子どもは自分の感情が自分のものとして感じられず、他者の感情が自分の内部に流れ込み、他者の要求に過剰適応するようになる。この構造は、後に S に完全に従った心理構造と深く結びつく。

R にとって、結婚し家庭を築くことは自分の人生を取り戻す象徴であった可能性がある。しかし S はその家庭を破壊し、離婚を強制した。この出来事は、彼にとって自己価値の崩壊、世界の安全性の喪失、そして幼少期の無力感の再活性化を引き起こしたと考えられる。Laing (1960) の言葉で言えば、ここで「世界の再侵入 (the re-entry of the world)」が起きたのである。幼少期に継父によって侵入された世界が、成人後に S によって再び侵入された。この二重の侵入は、支配者に従うことが唯一の生存戦略であるという心理構造を強化したといえる。

幼少期に形成された、逆らうと危険、従うしかない、という対人パターンは、成人後も繰り返される。S のような支配的な人物が現れたとき、幼少期の生存戦略が自動的に作動したと言ってもよいだろう。

Sass (1992) のいう自己性の障害は、R の行動を理解する上で極めて重要である。彼は自分の意志が自然に湧いてこず、他者の意志に吸収され、自分の行動が自分のものとして感じられない状態にあったと考えられる。これは、虐待環境で形成された、他者の意志に従うことで存在を保つという構造の延長である。

Sは暴力だけでなく、時に優しさや保護者的態度も見せた。これは典型的なトラウマ・ボンディングの形成パターンであり、支配者への依存を強化する。

拘置所で入れ墨を見せたRの行動は、Laing (1967) のいう偽りの自己の面であり、彼にとって外側に強さを演じる方法は、継父やSを取り入れる様式であった。それを初対面の相手に見せることは、内側の脆弱さを守るための防衛であったと考えられる。談話ののちに書かれたSCTでは、小さく整った文字、率直で屈折のない内容、誠実さが見られた。これは、安全な場でのみで現れる本当の自己の断片と理解できる。

弁護士との関係が良好だったことは、Rが本来、信頼関係を築く能力を持っていたことを示している。Sの死後、弁護士が初めて出会った安全な大人となり、間主観性の回復の萌芽が見られたと考えられる。

以上の分析を統合すると、Rの内的世界は、幼少期の虐待によって存在論的不安が形成され (Laing, 1960)、応答されない情動が間主観性の破綻をもたらし (Stolorow, 1994, 2007)、その結果として自己の境界が脆弱になり (Laing, 1961)、Sass (1992, 2014) がいう自己の自明性 (ipseity)、つまり自分が自分であるという感じ、経験が自分に属しているという前反省的な自己感、世界と自己が自然に結びついているという自明な与えられ方が失われ (Sass, 1992)、他者の意志が侵入しやすい構造が形成されていたと理解できる。こうした内的世界では、支配者への服従が唯一の生存戦略となり (Laing, 1960)、外側には偽りの自己が形成され (Laing, 1967)、真の自己は抑圧される。この構造こそが、逃れられない心のメカニズムとして捉えられるものである。

5 統合モデル：“構造”としての逃れられない心のメカニズム

Rの心理構造を、幼年期の虐待、家庭の喪失、そしてSによる支配という連続した体験に沿って考えると、これらの体験は単なる出来事の積み重ねではなく、彼の内的世界の構造そのものを変容させるプロセスとして理解することができる。本章では、Laing (1960, 1961, 1967) および Sass (1992) の現象学的理解と、Stolorow (1994, 2007) の間主観性理論を統合し、Rの心理構造を「逃れられない心のメカニズム」としてモデル化する。これは個別の事例を超えて、虐待や支配の被害者に共通する心理構造を理解するための理論的枠組みを提示する試みでもある。

【第1段階：間主観性の破綻 (Stolorow)】

Stolorow (1994) は、乳幼児の情動は他者の応答性によって初めて意味づけられ、統合されると述べた。しかし虐待環境では、恐怖や悲しみが他者に届かず、養育者が応答してくれず、情動が孤立したまま残る。Stolorow (2007) は、このような応答されない情動 (unresponded affect) が自己の一部として統合されず、後に恐怖や無力感として再活性化し、他者への過剰適応を生むと指摘している。すなわち、この段階は、情動が意味づけられず、内的世界が歪み始める段階である。

【第2段階：存在論的不安の形成 (Laing)】

間主観性の破綻は、Laing (1960) が述べる存在論的不安を生む。存在論的不安とは、自己の境界が脆弱で、他者が侵入してくるよう感じ、世界が脅威として迫り、自分の意志を持つことが危険に感じられるという、存在の根底に関わる不安である。

Rが継父を非難しなかったのは、単なる抑圧ではなく、継父の価値観が内的世界に侵入し、自己の一部に

なっていたためと理解できる (Laing, 1961)。この段階では、自己境界の脆弱性、他者の意志の侵入、世界の脅威化、が形成される。すなわち、世界が侵入してくるものとして体験される段階である。

【第3段階：自己性の障害 (Sass)】

存在論的不安が持続すると、Sass (1992) のいう自己性の障害 (ipseity disturbance) が生じる。これは、自分の感情が自分のものとして感じられず、自分の意志が自然に湧いてこず、他者の意志に吸収される状態を指す。

R が S に従ったのは、従いたかったからではなく、自分の意志が機能しない状態にあったためと理解できる。これは、幼少期に形成された、他者の意志に従うことで存在を保つという構造の延長である。すなわち、自分の意志が湧いてこない段階である。

【第4段階：支配者への服従 (Laing)】

存在論的不安と自己性の障害が重なると、支配者への服従が唯一の生存戦略となる。Laing (1960) は、存在論的不安を抱える人は他者の意志に吸収され、自分の意志を持つことが危険に感じられ、他者に合わせることでしか存在を保てないと述べた。

S は暴力だけでなく、時に優しさや保護者的態度も見せた。これは典型的なトラウマ・ボンディングの形成パターンであり、支配者への依存を強化する。この段階では、反抗は不可能であり、自己はほとんど不在となる。すなわち、従うことが唯一の生存戦略となる段階である。

【第5段階：偽りの自己の形成 (Laing)】

拘置所で入れ墨を見せた行動は、Laing (1967) のいう偽りの自己 (false self) を象徴している。偽りの自己は、内的な脆弱さを守るための鎧であり、他者に合わせるための演技であり、本来の自己を隠す構造として機能する。

一方、SCT で見られた小さく整った文字や率直な内容は、安全な場でのみ現れる真の自己 (true self) の断片である。偽りの自己と真の自己の乖離は、存在論的不安を抱える人に典型的に見られる構造である。すなわち、外側の強さと内側の脆弱さが乖離する段階である。

【統合モデル：逃れられない心のメカニズム】

以上のプロセスを統合すると、R の心理構造は次のようにモデル化できる。虐待 → 間主観性の破綻 (Stolorow, 1994, 2007) → 存在論的不安 (Laing, 1960, 1961) → 自己性の障害 (Sass, 1992) → 支配者への服従 (Laing, 1960) → 偽りの自己 (Laing, 1967) という流れである。

この連続的プロセスは、R の行動を「従順な性格」、「弱さ」、共犯者としての役割、として理解するのではなく、内的世界の構造的変容の結果として理解する枠組みを提供する。

本章で提示した統合モデルは、虐待から始まる一連の心理的プロセスが、個人の意思や性格を超えた「逃れられない心の構造」として形成されることを示した。これは個人の問題ではなく構造の問題として理解することができ、支配や従属の問題を理解する上で不可欠であり、臨床的支援においても重要な示唆を与える。

6 結論

R の心理構造を理解するためには、彼の生育歴に刻まれた対人関係の病理と、それが後年の支配関係にどのように再演されたのかを、多層的かつ理論的に検討する必要がある。本稿では、Laing (1960, 1961), Sass (1992), および Stolorow (1994, 2007) の三者の理論を参照しつつ、R の心理的脆弱性と従属構造を統合的に解釈してきた。本章では、その総括として、三者の理論がどのように相補的に R の心理構造を説明しうるかを示す。

まず、Laing の理論は、R の幼少期における心理的基盤を理解するための出発点となる。Laing は『*The Divided Self*』(1960) および『*Self and Others*』(1961)において、暴力的・支配的な家族環境のなかで、子どもが経験する「存在論的不安 (ontological insecurity)」を中心概念として提示した。自己の境界が脅かされる環境では、子どもは本来の自己を守るために「偽りの自己 (false self)」を形成し、他者に侵入される恐怖を抱えながら生きることを余儀なくされる。R は幼少期、継父からの暴力を受け、さらに弟を守るために自ら標的となる役割を担っていた。このような環境では、主体的に感情を表現することは危険であり、彼は自己を抑圧し、受動的に振る舞うことで生存を確保したと考えられる。SCT において継父に関する情緒的記述が現れないことは、Laing のいう存在論的不安に起因する深い防衛の表れであり、Laing が “There are experiences that are felt as unspeakable, lying beyond the reach of words.” (Laing, *The Divided Self*, 1960, p.110) と述べているように、彼の内的世界における語りえない領域存在を示唆する。すなわち、継父との関係は単なる記憶の欠落ではなく、自己の崩壊を防ぐために意識から隔離されたトラウマ領域である。

次に、Sass の「自己性の障害 (ipseity disturbance)」の概念は、Laing が描いた偽りの自己が長期化した結果として生じる、より深層の自己構造の脆弱性を説明する。Sass は『*Madness and Modernism*』(1992)において、統合失調症の核心を「自己の自明性 (mineness)」の障害として捉え、自己経験の主体性が弱まる現象を詳細に論じた。極度の対人ストレスや慢性的な情動抑圧は、自己の一貫性や主体性を弱め、自己経験の連続性を損なう。R が S の支配下で主体性を失い、他者 (S) の意向を自らの意思のように受け入れてしまう傾向は、まさに ipseity の脆弱さを反映している。SCT において彼が、自分の脆弱さについてほとんど触れず、外的な出来事、つまり S に翻弄された無念さのみを語る傾向は、自己の内的側面にアクセスする能力そのものが弱まっていることを示す。これは単なる洞察不足ではなく、自己性の障害が人格の基盤に組み込まれていることを示唆する。R にとって自分の内面を語ることは、自己の脆弱性を直視する危険を伴うため、外的事象の記述に留まることが心理的安定を保つための防衛となっていたと考えられる。

さらに、Stolorow の間主観性理論は、R の心理構造における情動の孤立とその再活性化のメカニズムを明確にする。Stolorow は『*Contexts of Being*』(1994) および『*Trauma and Human Existence*』(2007)において、子どもの情動が重要な他者に応答されないとき、それは「応答されない情動 (unresponded affect)」として心的世界に凍結され、後年、類似した対人状況で再活性化すると、自己の崩壊感や存在の不安定さを引き起こすと述べた。R の幼少期の恐怖や無力感は、まさに応答されない情動として固定されていた。S との関係は、この凍結された情動を強烈に再活性化させ、彼は幼少期の生存戦略である受動性・従順さ・自己抑制を再び発動させた。これは性格的弱さではなく、間主観的トラウマ反応として理解されるべきである。S の支配は、幼少期の継父の暴力と構造的に類似しており、R の内的世界にある未統合の情動を呼び覚まし、彼を再び従属によってしか自己を保てない状態へと追い込んだ。

以上の三者の理論を統合すると、R の心理構造は次のように総括できる。すなわち、幼少期の暴力環境により偽りの自己が形成され (Laing 1960, 1961), その結果として自己性の脆弱さが人格の基盤に組み込ま

れ (Sass 1992), さらに応答されない情動が支配関係の中で再活性化することで, 主体性の喪失と受動的従属が強化された (Stolorow 1994, 2007)。R の受動性は単なる性格傾向ではなく, 幼少期からの生存戦略が人格構造として固定化したものであり, 支配的他者との関係において再現される傾向を持つ。

しかし, S の死後, R は初めて支配者のいない環境に置かれ, 弁護士という, 応答してくれる他者に会った。弁護士は彼の語りを否定せず, 安定した態度で受け止めた。この関係は, 彼にとって初めて情動が応答される経験であり, 凍結されていた情動が安全な文脈で解凍される契機となった。SCT に見られた素直さや几帳面さは, 偽りの自己ではなく, 本来の誠実で繊細な自己が部分的に回復した兆候と解釈できる。

すなわち, R の心理構造は, Laing の存在論的不安, Sass の自己性の障害, Stolorow の応答されない情動という三つの理論を年代順に積み重ねることで, 初めてその全体像が明確に浮かび上がるのである。

【謝意】

故・井上敏明先生 (元海星女子学院大学教授, 六甲カウンセリング研究所所長) からは, 心理臨床の実践について多く学びを賜り, 本論文の事例研究進めるにあたり, 重要な示唆を頂戴いたしました。ここに深く感謝申し上げます。

<参考文献>

- Laing, R. D. (1960). *The Divided Self: An Existential Study in Sanity and Madness*. Tavistock. 天野衛 (訳) (2017) 『引き裂かれた自己 — 狂気の現象学』ちくま学芸文庫。
- Laing, R. D. (1961). *Self and Others*. Tavistock Publications.
- Laing, R. D. (1967). *The Politics of Experience and The Bird of Paradise*. Penguin Books. 笠原嘉・塚本嘉寿 (訳) (2003) 『経験の政治学』みすず書房
- Sass, L. A. (1992). *Madness and Modernism: Insanity in the Light of Modern Art, Literature, and Thought*. Harvard University Press.
- Sass, L. A. (2014). *Self-disturbance and schizophrenia: Structure, specificity, pathogenesis*. In *The Oxford Handbook of Phenomenological Psychopathology*. Oxford University Press. 丹野義彦・宮本俊幸 (訳) (2020) 「自己性の障害と統合失調症の現象学」『現象学と精神病理学』東京大学出版会, pp.97-132.
- Stolorow, R. D., Atwood, G. E., & Orange, D. M. (1994). *Contexts of Being: The Intersubjective Foundations of Psychological Life*. Analytic Press. 宮本忠雄・宮本小枝 (訳) (2001) 『存在の文脈 — 間主観性理論の基礎』誠信書房。
- Stolorow, R. D. (2007). *Trauma and Human Existence: Autobiographical, Psychoanalytic, and Philosophical Reflections*. Routledge.

